

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成21年 5月15日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 医学研究科 外科学講座 乳腺外科

職 名 教授

氏 名 戸 井 雅 和

事業区分	平成21年度・シンポジウム等開催助成		
事業内容	京都乳癌コンセンサス会議2009国際大会		
開催期間	平成21年4月16日 ~ 平成21年4月18日		
開催場所	国立京都国際会館		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有(抄録集)		
会計報告	事業に要した経費総額	(飲食・宴会経費を除いた額)	32,316,154 円
	うち当財団からの助成額		1,500,000 円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) ファイザー株式会社・中外製薬株式会社 他	
	経費の内訳と助成金の用途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	人件費	3,695,666	
	会場費	7,440,339	1,500,000
	アンケートシステム構築費	177,430	
	ポスター賞金	123,500	
	招待関連費(謝金・交通・宿泊・アテンド・記念品)	11,577,869	
コンgresバッグ	218,400		
宣伝・通信・事務費	3,163,820		
各種手数料(クレジットカード、税理士報酬、他)	2,119,130		
出版関連費	3,800,000		
合 計	32,316,154	1,500,000	

「成果の概要 / 戸井 雅和」

京都乳癌コンセンサス会議 2009 国際大会

開催日 平成 21 年 4 月 16 日、17 日、18 日

開催場所 国立京都国際会館 アネックスホール及び ROOM104

会議の背景・目的

「京都乳癌コンセンサス会議」は、乳癌の治療方法の合意を形成する目的で、2007 年に京都大学を中心に発足。今回開催された「国際大会」では個々の乳癌患者により適切な治療を行うため、国内外のエキスパートが集結し、国際的なガイドラインの策定を目指して討議した。

海外では既にスイスのザンクトガレンで初期乳癌治療に関するコンセンサス会議が行われているが、「京都乳癌コンセンサス会議」では特に局所療法を扱った。第一回の会議でコンセンサスが図れた部分を中心に今後も会を重ね、治療方法のアルゴリズム形成化を目指す。

会議の構成

会議は、6 つのセッションと 5 つのセミナー、最終日の特別講演と「コンセンサス会議」で構成された（別添「抄録集」pp3-5 参照）。各セッションでは各分野のエキスパートの講演に続き、個々の実地臨床の紹介、アンケート調査の報告、主要な課題に関する討議・提言がなされ、各ファカルティの協力のもと最終日への「コンセンサス会議」へと続いた。

会議の参加者

全体で 417 名の参加があり、そのうち半数以上は海外から来日した。招待したファカルティは約 60 名で、基調講演・セミナー・コンセンサス会議への参加など各々が専門分野でコンセンサス形成に尽力された。

コンセンサスの形成

コンセンサス形成のため、アンケート調査を利用した。事前にオンラインで専門医にアンケート調査を依頼しその結果を各専門分野の基調講演後に発表し、5 - 7 名のパネリストが壇上でディスカッションを行った（1 日目・2 日目）。最終日（3 日目）には、1 日目・2 日目のディスカッションの結果を踏まえ、「コンセンサス会議」が行われた。具体的には実際の治療をイメージした「設問」が与えられ、世界各国から集結したエキスパートらが

投票を行う形で合意形成を行った。この会議には最新式の「オーディエンス レスポンス システム」が用いられ、各人が手元の小さな機器で回答番号を選択することができ、即座にスクリーンに結果グラフが映し出され、内容のみならず設備も大変好評であった。

具体的にコンセンサスが得られたのは、腋窩の外科治療、乳房切除、切除標本の取り扱い、術後放射線療法に関するもので、それぞれ、最小限の切除すべきリンパ節数と切除の方法、局所再発のリスクからみた至適乳房切除方針、病理組織学的検索法に関する記載の統一、乳房温存術後の放射線療法の適応と方法があった。さらに、今後臨床試験で検討すべき点として、Dr. Klimberg (Arkansas U.) Dr. Robertson (Nottingham U.), Dr. Forbes (Newcastle U., Australia)から腋窩縮小郭清の際の非郭清領域の転移状況に関する前向きな検討、Dr. Golshan (Harvard U.)から非浸潤性乳癌のセンチネルリンパ節生検適応症例の選択、Dr. Benson (Cambridge U.)から局所再発と予後との関連性に関する検討が、Dr. Strom (MD Anderson Cancer Center)からは乳癌の分子プロファイルと放射線治療後の局所制御との関連性に関する検討が指摘された。いずれも非常に重要な研究であるという点において意見の一致を見た。さらに、乳癌発生高リスク患者における局所治療、特に全乳房切除の適応についても重要な提案が行われた(Dr. Roukos, Greece)。

一方、今回の会議でコンセンサス形成が難しかったのは、術前ホルモン療法に関する診療アルゴリズム、特にバイオマーカーの利用法、と術前化学療法後の乳房・腋窩の手術で、症例検討の中で極めて活発な討議、意見交換が行われたが、今後さらに継続的検討、研究を行うこととなった。特に、Dr. Winer (Harvard U.), Dr. Von Minckvitz (Frankfurt U.), Dr. Sasano (Tohoku U.), Dr. Pegram (Miami U.)より今後の進め方について極めて建設的な提案が行われた。この分野は新しい研究分野であり、今後高い発展性が予測されている。実地臨床におけるインパクトも非常に大きい。今回の討議内容はそれ自体が今後の臨床研究を考慮する上で重要な指針になると考えられた。

今回の成果は、海外の主な専門ジャーナルに投稿すると同時に、これから乳癌治療分野を本格的に学ぼうとする若い医師向けのテキストブックの形に纏めるべく準備中である。

今後について

一人一人の患者さんに対して、各科の英知を集約して最適な治療法を模索し、具体的な治療の選択肢についても分かりやすく提示・説明できるよう今後も会を重ね、QOL(Quality of Life)の向上を目指す。この「京都乳癌コンセンサス会議」での合意形成の成果をアルゴリズム化する事が会議の最終目的である。(了)